

# ときを結ぶ

継承考 改元とともに

41

## そろばん

江戸時代の寺子屋以来、この国が経済成長の駒を駆け去ってきた頃までだろうか。子どもの基礎的な学びは、「読み・書き・そろばん」と言われた。街を歩けば、「そろばん教室」の看板を覗けた。そんな景色は、電卓の普及によって、文房具店でも、主役の座から追いやられて久しい。デジタル社会の到来という荒波の真ただ中で、生き残るのか、敷設なく、なすろばんづくりの職人は、「アナログ」の価値を信じ、今日も黙々と作業機に向かう。

### 父の背中

出雲市中心部から車で1時間ほど。山あいにある静寂奥出雲町は、「神話の里」として知られ、兵庫小野市と並び、そろばんの二大産地。前者は「雲州そろばん」、後者は「播

州そろばん」と呼ばれ、奥出雲町の植田地区には1980年代まで、あちこちに製造工場があった。周りは「たたら製鉄」が盛んで、全国から集まる職人がいて、そろばんが必要だった。最盛期の生産量は年間20万。しかし、電卓やパソコンに押され、現在は2万5千にまで落ち込む。工場は一つ、また一つと姿を消している。

「いっぺんに心底に落ちたね。半分以上が廃業してしまった。現代の名工に認定された伝承工芸士の内田文雄(72)は、小柄な体型で、黒船乗りのような断髪を受けたことを憶える。

## アナログの力を信じて

勤務で基礎へ入り打ち込んで、30歳を突入り再び申し出る。今度は許してくれた。ただ、父の教えは厳しかった。「完全な徒弟制度。怒られて差し金やかなが飛んできたり。歯を食いしばって頑張った。父が選ばれると、発如「道具をやる」と譲り受ける。箱には「二代文の朱印が押されていた。

### 復権の動き

内田たちがつくるそろばんは、「雲州」と呼ばれ、187の工程を経て完成する。玉の動きがめろめろで早い付くように止まり、「はじき返りにく」のが持ち味。「別の伝統工芸品」に指定されている「私のところを通らない、世の中に出ないか」と話す。上には、愛護を許さない職人のプライドが。雲州算盤同組合に所属する伝承工芸士は70代の内田と幼代の2人。伝承産業を守っていくには後継者の育成が欠かせない。工芸士を目指し門をたたいた者を一人前に教えるのも大切な使命である。



そろばんの仕上げをテックする内田文雄。電卓の普及で生産は大きく落ち込んだが「そろばんには精神を集中させる力がある。子どもたちのために」と話す。島根県奥出雲町

### 80カ国に学びの場

室町時代に中国から伝来したとされるそろばんは、学校教育の現場から消えたわけではない。例えば、小学校4年生算数の学習指導要領解説書には「そろばんを用いた数の表し方と計算に関する数学的活動」が明記され、加法(足し算)や減法(引き算)の計算、仕組みに着目した大きな数や小数の計算を掲げる。

国際算普及基金によると、何らかの形でそろばんを教える場があるのは、約80カ国に上るといふ。同基金は毎年、トンガとパラオに使節団を派遣しているほか、今年8月には「白眉」を開催、インドネシア、アラブ首長国連邦(UAE)、スリランカなど8カ国の教師らが参加した。

### 海外で注目

一方、そろばんで培われた基礎学力が、日本の経済発展につながったのではないかと、海外から注目されるようになる。国際協力機構(JICA)は80年から30年間にわたり、51人もの算盤教育隊員をトンガに派遣。奥出雲町に合併する前の同町も、94年から2003年まで、日本国際交流センター(自民)とともに、タイへの指導者派遣

「そろばんには精神を集中させる力がある。子どもたちのために」。時代の流れにあらがえないことは驚きながら、内田が口にした言葉が重く響いた。政経略文・橋詰邦弘 写真・堀越

「おわり」